

認知症とは・青森県の 認知症の現状と課題

弘前大学大学院医学研究科 脳神経内科学講座 教授 富山 誠彦

認知症って何？

認知症は、何らかの病気や障害などの様々な原因によって、記憶や判断などを行う脳の機能（認知機能）が低下し、日常生活や仕事に支障をきたすようになった状態のことをいいます。病名ではなく、特有の症状や状態を総称する言葉です。認知症の中で最も多くみられるのはアルツハイマー型認知症で、脳の神経細胞の変性に

より、脳が少しずつ萎縮してきます。

最近では、生活や仕事に支障をきたさないような軽い認知機能障害がある方を、軽度認知障害と早期診断がなされるようになりました。軽度認知障害は、認知症に移行する準備状態とも言えますが、健康に戻ることもあります。

認知症の患者さんはどれくらいいるの？

厚生労働省研究班の大規模研究によれば2012年時点の65歳以上の認知症の有病率は15%、全国の認知症の人の数は約462万人と推計されました。認知症を発症する前段階とされる軽度認知障害の人は、約400万人と推計されています。青森県の現在の人口は122万人で高齢化率は34.3%です。2012年の有病率を当てはめると、青森県にはおよそ6万人の認知症患者と

推定されています。5万2,000人の軽度認知障害のかたがいることとなります。今後、高齢者人口が増加すると同時に、認知症患者の数も確実に膨らんでいきます。2025年には、認知症患者さんは全国で700万人前後、つまり高齢者の5人に1人が認知症なのではないかと言われています。これから先、より一層、認知症は誰でもなる、実に身近な病気になってきます。

若いうちから発症する人もいます

認知症は高齢者の病気と考えられがちですが、実は若い

ちから発症する人も少なくありません。2009年に行われた厚生労働省の調査によると、18〜64歳の現役世代の認知症発症者数は全国で約3万7,8

00人に上ります。また若年で発症する認知症の中には、遺伝性認知症の方もいらっしゃいます。

「認知症のもの忘れ」と「加齢によるもの忘れ」の違い

年をとれば誰もが思い出しにくいことがすぐに思い出せなかったり、物覚えが悪くなったりと、人の名前を忘れてしまうことがありますが、これらは脳の老化によるものです。加齢による「もの忘れ」は、認知症と同じ現象だと思われがちです。しかし、加齢によるもの忘れと認知症のもの忘れでは、現れる症状に大きな違いがあります。その違いは以下の通りです。加齢によるものの典型例は「つい約束の時間を忘れてしまった」「書類をどこにしまったのか忘れた」などが挙げられます。これは「約束をしていること」「書類をどこかにしまっていること」は覚

えており、「忘れてしまった」という自覚がある状態です。一方、認知症の場合は「約束をしたこと」や「書類をしまったこと」自体を忘れてしまいますので、忘れたことを自覚できません。このように、健康な人のもの忘れが体験したことの一部のみを忘れるのに対して、認知症は体験したことそのものを忘れてしまうのです。認知症によるもの忘れを「年齢相応」と済ましてしまふと、病気の発見が遅れてしまいます。

軽度認知障害と認知症

軽度認知障害は、認知機能障害があっても、生活には支障をきたさない状態のことです。軽度認知障害と認知症の関係について、認知症の最大の原因疾患であるアルツハイマー病を例に説明します。アルツハイマー病は「アミロイドβ」、次いで「タウたんぱく」が脳の中に蓄積する、最も多い認知症の原因疾患

